7）自治医大における極低出生体重児の予後（就学前発達検査）

（分担研究：ハイリスク児の地域ケアのあり方に関する研究）
研究協力者　宮　益　益　知[1)]
共同研究者　森　　優　子[1)]　本　間　洋　子[1)]

要　約：自治医大における1987年1月～1989年3月出生の極低出生体重児40名に対して、就学前発達評価を行った。精神では28%が正常、運動では55%が正常であった。行動心理では精神でＩＱ85以上の28名中、36%に発達性言語障害、18%に視覚視空間認知障害、18%に多動を認めた。極低出生体重児のなかには精神遅滞ではないが軽度の発達上の問題を有する症例が多く含まれており、早期よりの発達の支援が必要である。

目　的：極低出生体重児の死亡率は著しい改善がみられるもののその後の発達、特に長期予後に関する報告は少ない。私達は当研究班のプロトコールに従って極低出生体重児の就学前の発達について調査したので3年間のまとめを報告する。

方法：対象は1987年1月から1989年3月に出生した58名中、当院未熟児センターで養育され、生存退院し経過観察されている症例は44例である。このうち40例に5歳～6歳に就学前健診として発達の評価を行った。発達については当研究班のプロトコールに従い、問診、診察、精神発達検査（WPPSI, WISC - R）を行い、Axis Ⅰ～Ⅵ、運動、精神発達、行動、けいれん、感覚障害、合併症の6分野について診断した。

結　果：精神では32%が正常、32%でＰＩＱがＶＩＱより15以上高かった。運動では55%が正常であった。行動心理ではＩＱが85以上の28名中36%に発達性言語障害、18%に視覚視空間認知障害を認めた。けいれん性疾患はてんかん1名、複雑型熱性けいれん2名、単純型熱性けいれん2名であった。感覚器の合併症として斜視2名、中耳炎2名がみられた。身体合併疾患として気管支喘息5名、アトピー性皮膚炎1名がみられた。

結　語：極低出生体重児のなかには精神遅滞ではないが軽度の発達上の問題を有する症例が多く含まれおり、早期よりの発達の支援が必要である。

精　神

	（名）	（%）
正　常	14	32
｜VIQ－PIQ｜≧15, IQ≧85	14	32
境　界	5	11
軽度精神遅滞	4	9
中等度精神遅滞	3	7
検査未施行	4	9
計	44	100

正常：IQ≧85, ｜VIQ－PIQ｜≧15
境界：85＞IQ≧70
軽度精神遅滞：70＞IQ≧50
中等度精神遅滞：50＞IQ≧25
重度精神遅滞：25＞IQ

運　動

	（名）	（%）
正　常	24	55
不器用	3	7
微細運動障害	12	27
脳性麻痺	1	2
検査未施行	4	9
計	44	100

行動心理　（重複有り）

	（名）	（%）
正　常	11	39
発達性言語障害	10	36
聴覚認知記憶障害	1	4
視覚視空間認知障害	5	18
注意集中障害	2	7
発達性構音障害	3	11
多　動	5	18
選択性かん黙	1	4

（%は精神が正常またはIQ≧85, ｜VIQ－PIQ｜≧15の28名中の割合を示す）

1）自治医大小児科 (Dept. of pediatrics, Jichi Medical School)

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約:自治医大における 1987 年 1 月～1989 年 3 月出生の極低出生体重児 40 名に対して、就学前発達評価を行った。精神では 28%が正常、運動では 55%が正常であった。行動心理では精神で IQ85 以上の 28 名中、36%に発達性言語障害、18%に視覚視空間認知障害、18%に多動を認めた。極低出生体重児のなかには精神遅滞ではないが軽度の発達上の問題を有する症例が多く含まれており、早期よりの発達の支援が必要である。